

(第二時限・八〇分)

二〇一〇年度 ⑤ 国 語 問 題

(全19ページ)

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 二、解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい。
- 三、解答に字数制限がある場合には、句読点・カッコも一マスとすること。
- 四、受験学部・受験方式によって解答すべき問題を指定しているので注意すること。

(注) 受験学部を受験票で十分に確認すること。

例

である。	しか	し、	「そ	れは	」
------	----	----	----	----	---

学部A方式

受験学部	解答する問題
法学部	一、二、三
産業社会学部	
国際関係学部	
政策科学部	
映像学部	
経済学部	一、三、四
経営学部	
スポーツ健康科学部	
文学部	

S方式

受験学部	解答する問題
アジア太平洋学部	一、二
国際経営学部	

題

- 五、マークセンス方式の解答欄は解答用紙の左欄にあります。
- 六、マークに際しては、マークした部分を機械が直接読み取って採点するので、左記の注意事項を読み、間違いないようにしなさい。

- 1、マークする時は、HBの黒鉛筆(シャープペンシルはHBの0.5ミリ以上の芯)を使用すること。
- 2、解答用紙は折り曲げたり、汚したりしないよう注意すること。
- 3、だ円は次のように完全にぬりつぶすこと。
 - (1) 解答がひとつの場合(例えば③と解答したい場合)

①	○
②	●
③	●
④	○
⑤	○
 - (2) 解答がふたつの場合(例えば③と⑤と解答したい場合)

①	○
②	○
③	●
④	○
⑤	●
- 4、マークする場合の悪い例(次のようにマークしないこと)

①	○	①	○	①	○	①	○
②	○	②	○	②	○	②	○
③	○	③	○	③	○	③	○
④	○	④	○	④	○	④	○
⑤	○	⑤	○	⑤	○	⑤	○

○で囲む
 ✓印をつける
 線を引く
 ぬりつぶしが不完全
- 5、一度マークした解答を訂正する場合は、消しゴムで完全に消してからマークし直すこと。

×印をつけても消したことになりません。

七、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

— 次の文章を読んで、問いに答えよ。

邦越くにこしやすくろ康郎は、タクシーの背に深くもたれて、昂たかぶりをおさえるように目をつむっていた。三十年も前に死んだ緋紗子ひさごが、松村秋子との話の中で、鮮やかに康郎の胸によみがえったのだ。富久江と結婚してから、康郎は緋紗子についてほとんど語らなかつた。職場でも、康郎が再婚者であることを知らぬ者が多かつた。かなり親しい友人でも、いや、親戚の中にさえ康郎と緋紗子の結婚を知らぬ者があつた。緋紗子は、空襲の最中さなかを、札幌から広島のすぐ近くの江田島まで、着替えを入れたリュックサック一つを背に、康郎の胸にとびこんで来た。松村秋子夫妻が仲人となり、二人は江田島の海軍官舎で、ささやかな結婚式を挙げ、披露宴をひらいてもらった。そしてその年の八月、緋紗子の乗つた船が機雷に触れて、あつけなく死んでしまった。僅わずかか四カ月のあまりにも短いこの結婚生活を知る者がなかつたのは無理もない。結婚に至るまでの恋愛、そして婚約期間のほうが長かつたことになる。

今日はその緋紗子の思い出を、松村秋子と共に思う存分に語ることが出来た。そんな中で、いつしか康郎は、自分が海軍士官の服を着ていた二十代の若さに戻っていた。

秋子と康郎が、寸分たがわず記憶していた緋紗子の言葉があつた。それは、軍艦はるな榛名が、目の前で沈むのを見た日から言いつづけた緋紗子の言葉であつた。

「ねえ、誰がこんな戦争をしてもいいと許したの。戦争を許す権利が、人間にあるのかしら」

秋子はこの言葉を、榛名の沈むのを共に見た日に聞いたと言つた。榛名には秋子の夫が乗っていた。それだけに、秋子には緋紗子のその言葉が胸に刺さつて、その後今日まで、幾度思い出したかわからないと秋子は言つた。

「軍人の妻であるわたしには、緋紗子さんの言葉が、大胆不敵に聞こえました。もし憲兵にでも聞かれたら、大変なことですもの。でもね、わたしたちがあの時代にあつて、思うことも出来なかつたことを、緋紗子さんは口に出すことが出来たのね。時が経つにつれて、緋紗子さんの偉さがわかつて来たんです」

「緋紗子って、そんな奴でした。彼女は直感的に、人間にとって一番大事なものは何かを知っていました」

そう答えた時、不覚にも康郎は涙がこぼれた。今も車の中で、康郎はその時のことを思っていた。そして、帰り際に聞いた秋子の言葉が、康郎の胸に重かった。秋子は言った。

「緋紗子さんの赤ちゃんも、一緒に死んだのねえ」

「え？ 緋紗子の赤ん坊が？」

「あら、ごぞんじなかった？ 緋紗子さんは妊みこもつていらしたのよ」

昼も夜もほとんど砲台①にツめていた康郎に、緋紗子は告げる機会を失ったのであろうか。康郎は、三十年を経て、初めて緋紗子の妊娠を知った。軍艦榛名が沈んで以来、美しいものを見たいと緋紗子が言い出したのは、胎教のためであつたらうか。その美しいもの、夜光虫を見に行つて、緋紗子は死んだのだ。

（そうか。緋紗子は、それで美しいものが見たかつたのか）

緋紗子の妊つていたのは、男の子だつたらうか、女の子だつたらうかと、康郎はひどく痛ましい思いがした。

「またいらしてくださいね」

秋子の言葉に深くうなずいて、康郎は店を出て来た。

（富久江が待っているだらうな）

康郎は車に揺られながら、何かうしろめたいような気がした。先程秋子の店で、家に電話をしようと思った。が、話し中で、康郎は秋子の待っている部屋に戻った。

車は、明るい街の中を通り過ぎ、いつしか暗い神楽岡の坂にかかっていた。左手の広大な神社のケイダイ②は、自然林の深い森になつていて、森閑としている。まるで山の奥にでも入つて行く心地だが数百メートル走つて左に折れると、水銀灯の街灯が立ち並ぶニュータウンの通りになる。車はなおも左手に暗い森を見ながら、しばらく走つてようやく両側に家の並ぶ緑が丘の団地に出た。アパートの高層ビルの灯が近づいて来た。康郎は、毎月十四日には、必ず秋子を訪ねて、緋紗子について語り合つてやりたいと思つた。敗戦の前日、八月十四日が緋紗子の命日だからだ。そのぐらいのことをしてやらなければ、余りに緋紗子が哀

れに思われた。もし緋紗子の乗った船が機雷にさえ触れなければ、自分と緋紗子は今も共に暮らしている筈なのだ。

(緋紗子との生活……)

それは、活気に満ちた楽しいものであるような気がする。富久江との生活は、康郎には少し退屈であった。心の底で触れ合うような、胸に迫るいとしさを富久江には抱けない。と言って、格別富久江に不満があるわけではなかった。

(何れにせよ……)

やっぱり緋紗子がいとしく思われる。

車は間もなく康郎の家の前にとまった。

「やあ、ありがとう」

⑦ 康郎は少しチップをはずんで車を出た。そして、はっと息をのんだ。蛙の音が、丘のすぐ下の田んぼから、湧き上がるように聞こえて来た。康郎はふつと齋藤茂吉の短歌を思い出した。

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

有名な茂吉の歌集『赤光』の中にある歌である。

(わが家には、死に近い者はいないが……)

今夜の蛙は、天を圧するような大合唱であった。と、不意にぱたりと蛙の音が途絶えた。が、次の瞬間、再び蛙の音があたりを圧した。康郎は言い難い満足感を持って、玄関のブザーを鳴らした。

夕起子が中からドアをあけ、

「お帰んなさい」

と、声低く迎えた。

「やあ、遅くなってしまつて……。実はね、高原教授に誘われてね、飲みに行ったんだ。『あつ』という店でね、酒も肴さかなもうまかつた。あそこママはいいママだったなあ、清潔で」

康郎はいつになく **A** になつていた。その康郎を、夕起子は少し固い表情で見守つた。

「店から電話をしたんだけどね。家の電話が話し中だね。明日、高原教授に会つたら、君からもお礼を言つておいてほしいね」
康郎はそう言つて居間に入った。康郎は、高原に別れて秋子の店に寄つたことを言いそびれた。

秋子のことを語ることは、緋紗子のことを語ることになる。それは、富久江にも寛にも語りたくないことであつた。いや、語るべきことではないように思われた。夕起子は軽く唇を噛んだまま、黙つてうなずいた。夕起子の胸はなぎさの夫兼介のことで一杯になつていた。それはなぎさにはもちろんのこと、富久江にも寛にも語れないことであつた。実家の母にさえ告げることがためらわれた。そんな思いの中にあつて、康郎の帰宅の遅れたことにも、夕起子はこたわつていた。が、たつた今、康郎は高原教授と街に出たことを夕起子に告げた。夕起子は康郎に裏切られなかつたことを知つて、深い安堵③を覚えた。研究室にいると思つていた康郎が、いつのまにか大学を脱け出ていた。その上に、兼介のことがあつた。夕起子は、耐えていたものが一度にあふれて来そうな思ひになつた。

「どうしたんだね。富久江も寛もないようだが……」

へー

「お父さん……なぎささんが……」

言いかけて、夕起子は涙ぐんだ。

「何、なぎさが？ なぎさがどうした」

車を運転するなぎさが、交通事故でも起こしたのかと、康郎は顔をこわばらせた。

「あのう……子宮外妊娠で、手術なさつたんです」

夕起子の目から涙が盛り上がった。

「えっ？ 手術？ いつだね？ どの病院かね」

「康郎がソファから立ち上がった。」

「夕方です。病院は、なぎささんのご近所の山部病院」

〈2〉

「で、経過は？」

「命は取りとめたそうです」

〈3〉

「命は取りとめた……」

康郎はふっと **B** を思った。

「それは大変だった。悪かったねえ、わたしの行き先がわからなくて、夕起ちゃんの涙を、康郎はそのように解釈した。」

「ええ、研究室だとばかり思ったものですから」

「勉強などと言って、こっそり遊びに出かけたかと、さては腹を立てていたね」

〈4〉

「いいえ、そんな……」

「とにかく車を呼んでもらおうか」

夕起子はいつも呼ぶハイヤー会社のダイヤルを廻した。

「兼介君は研修会だったね」

「は」

〈5〉

「連絡はついたの」

「つきました。……でも……」

「でも？　でも何だね？」

「いいえ、何でもありません」

再び夕起子の目から涙があふれた。夕起子は、康郎に何もかも言ってしまった衝動にかられた。男というものは、妻が病気で、兼介のように平然としていられるものなのか、と聞きたかった。旅先で、妻にかくれた遊びをするのが男の常なのか、と尋ねたかった。信頼し合っているようなふりを見せて、実は裏切りながら、それで子供を産んでもよいのかと聞きたかった。康郎は学生に人気のある教授であり、夕起子自身、康郎に憧れを抱いていた。竟と結婚したのは、竟が康郎の息子であるという事実に、大きなウエイトが置かれていたような気がした。

「お父さん」

夕起子は無性に、康郎に甘えなかつた。康郎には何を言っても、心配がないような気がした。その激しい目の色に、康郎がはつとした時、家の前にタクシ一の着いたらしい音がした。

(三浦綾子『青い棘』より。なお一部を改めた)

注 江田島は広島県呉市の西方、広島湾にある島。もと海軍兵学校の所在地。

機雷は「機械水雷」の略。水雷は多量の爆薬を強固な容器内に入れ、水中で爆発させて敵艦を破壊する装置の兵器。

問1 傍線①、②のカタカナを漢字に改めよ。

問2 傍線③、④の読み方をひらがなで書け。

問3 A に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 軽口 2 大胆 3 饒舌 4 辛辣 5 磊落 6 卑屈

問4

B

に入れるのに、最も適当と思われることばを、本文中からそのまま抜き出して、三字で書け。

問5

本文中の登場人物の関係について、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 康郎の先妻が緋紗子で、緋紗子の女学校の先輩が秋子で、夫同士も親しかった。
- 2 康郎と高原教授は職場の同僚で、高原の娘が夕起子で、夕起子は寛の妻である。
- 3 康郎の娘がなぎさで、なぎさの夫の兼介は康郎の部下で、寛の義理の弟である。
- 4 康郎と富久江は夫婦で、夫婦の子が寛となぎさで、康郎は妻に不満はなかった。
- 5 康郎の長女の夫が兼介で、兼介の妻は出産間近で、兼介は妻にだまされていた。
- 6 康郎と秋子は旧知の間柄で、秋子は現在料理屋の女将で、康郎は常連客である。

問6

傍線㉗に「康郎は少しチップをはずんで車を出た」とあるが、それはどうしてか。その行動につながる思いが述べられている一文を、本文中から三十五字以内でそのまま抜き出して、初めと終わりの五字を書け。

問7

傍線㉘に「夕起子は、耐えていたものが一度にあふれて来そうな思いになった」とあるが、夕起子は何に耐えていたのか。最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 不足感
- 2 不快感
- 3 不信任
- 4 不吉感
- 5 不満感

問8

次の一文は、本文中のヘ1～ヘ5のどこに入れるのが最も適当か。その番号をマークせよ。

思いをこめて夕起子は康郎を見た。

問9

本文の内容に合致するものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 夕起子は、なぎさの急病を知らせるために大学に電話をし、勉強をしに行くと言って出かけた康郎がそこにいなかったことに裏切られた思いを深め、もともと康郎への憧れからその長男の寛と結婚しただけに、もう邦越家には自分の身の置き場がなくなったことを痛感していた。

2 夕起子は、大学にいなかった康郎が高原教授と飲みに出ていることを知り、康郎が途中で家に電話をしていたこともわかり、義父に裏切られなかったことにそれまでのはりつめた気持ちが緩み、夫の姿は念頭から去り、康郎への思いを告白しようと思いつめた表情で康郎を見た。

3 夕起子は、妻の急病を知ってもものきな兼介や、長女の危急も知らずに飲み屋に行きそのママと先妻の思い出話に時を過ごしていた康郎に、男というものはそういうものなのかと衝撃を受け、今までの緊張感が一挙に脱力感へと変わってしまうのを、どうにもできないでいた。

4 夕起子は、かつての康郎と緋紗子のことを秋子から聞いて、康郎が自分を見ているのは、実は自分のうえに緋紗子を重ねていたのだと知り、さらに、義妹の急病を知らせるために兼介の宿に電話をして、その不実を知ったことで深く傷つき、心のなかの何かが崩れ去るのを感じた。

5 夕起子は、急病のなぎさのもとへ義母と寛が出かけた後、研修会のため出張中の兼介と大学にいる康郎に緊急連絡をして、出張先で兼介が身重の妻を裏切っているのを知ったり、大学にいるはずの康郎がそこにいなかったことで、こだわりを深め、複雑な思いを噛みしめていた。

問10 斎藤茂吉の歌集を、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 悲しき玩具 2 白き山 3 海の声 4 みだれ髪 5 桐の花

二 次の記事を読んで、問いに答えよ。

覚えるだけでなく、知りたい、と人間は欲する。この「知りたい」という欲望には、「私的な欲求」というレベルと、知ることの社会的な（公的な）効果という二つのレベルの問題が含まれる。学問の自由はなぜ必要なのか。その根拠を考える場合、この二つのレベルを区別しなければならぬ。まず、人間の私的な知識欲という側面に注目してみよう。へー

教育研究組織における教師などの構成員が調査研究を行い、自分の意見を述べ、思想を伝え、自分が真理だと思ふことを言葉にする「精神の自由」に対する要求、という視点から捉えようと、学問の自由は古代ギリシア以来の古い歴史をもっていることになる。しかし大学の自治のための「学問の自由」は、中世の大学で意識され議論されることはなかった。ヨーロッパ世界で、学問の自由が、いわゆる宗教上の「寛容の思想」と共に重要性を帯びるようになり、その重要性が書物で提示されるようになった古典的著作は、フランシス・ベーコンの『学問の促進』だと言われる。その根底にある社会的な条件として、(1) 国家間の貿易の拡大により、知識の伝播が盛んになり始めたこと、(2) 思想や知識も、競争し、論争し、証明し合うことによつて、その価値や有効性を確認するという姿勢が強まったことがある。

歴史的に見ると、人間が「知ることを欲する」がゆえに、好奇心に駆られて行ってきた研究が意図せぬ結果を偶然生み出し、それが有益な結果を人類にもたらしてきたという例は多い。もちろん、初めから特定の問題や困難を克服しようとして探求していたものが、長い努力の末に発見されるということもある。しかし偶然の結果としてあるものが発見されるというケースも多く、人類は好奇心から、実に莫大な量の知識を偶然獲得してきたのである。へ

この点を、プラトンは『メノン』において次のように巧みに語っている。

メノン「おや、ソクラテス、いったいあなたは、それが何であるかがあなたにぜんぜんわかっていないとしたら、どうやってそれを探求するおつもりですか？ というのは、あなたが知らないものなかで、どのようなものとしてそれを目標に立てたうえで、探求なさろうというのですか？ あるいは、幸いにしてあなたがそれを探り当てたとしても、それだということはどうしてあなたにわかるのでしょうか——もともとあなたはそれを知らなかったはずなのに。」

ソクラテス「なぜなら、事物の本性というものは、すべて互いに親近なつながりをもっていて、しかも魂はあらゆるものをすでに学んでしまっているのだから、もし人が勇気をもち、探求に倦むことがなければ、ある一つのことを思い起こした——このことを人間たちは「学ぶ」と呼んでいるわけだが——その想起がきっかけとなって、おのずから他のすべてのものを発見するということも、十分ありうるのだ。それはつまり、探求するとか学ぶとかいうことは、じつは全体として、想起することにほかならないからだ。」へ3

この点に関しては、ベーコンの『学問の促進』に近代科学の発見期の「発見」の例がいくつか挙げられている。「医薬と治療法が先に見出され、後に理由と根拠が論ぜられたのであって、理由が先に見出され、それらの光によって医薬と治療法が発見されたのではない」というケルスの言葉をベーコンは引用する。これは近年よく耳にする Serendipity という言葉を想起させる。Serendipity (元来、「掘り出し物」を見つめる才能を意味した) が、いかに学問の発展にとって重要な働きをしてきたのかを示す言葉であろう。へ4

偶然性という重要な要素を示すもうひとつの例は、ある意図をもって追究された問題が、その不可能性ゆえに、結果として新しい概念や原理の定立に結びつくというケースである。科学史上よく知られた例として、錬金術と永久機関がある。

錬金術は卑金属に化学薬品を加えることによって貴金属(多くは金)を精錬しようとする実験を指す。その歴史は古代ギリシア、アラビア、中世ヨーロッパと古いが、神秘主義や魔術とのかかわり、政治や宗教上の権力者との関係が重視され、その副産物と科学史上の意味はあまり取り沙汰されない。しかし、その近代科学への貢献は大きい。錬金術によって「元素」という概念が初めて確立され、近代科学としての化学(chemistry)が誕生したからである。また錬金術師たちが、蒸留技術を進化させて高純度のアルコールの精製を可能にしたこと、天然物からの成分単離、ヨーロッパでの磁器の製法の確立にも貢献した。錬金術によって化学分析、化学工業の発展が築かれたといっても過言ではないのだ。

また、永久機関も物理学上類似の貢献をしたと言われる。永久機関は、「外部からエネルギーを受け取ることなく、仕事を継続できる装置」を意味する。

A

この夢が実現すれば、エネルギー問題は存在しなくなる。十八世紀の科学者は、この装置の

実現に多くのエネルギーを費やしたが、力学的に実現不可能であることがわかった。熱を用いてもこの夢が実現不能であるという事は、熱力学の法則の定立へとつながり、そこから物理学の一大分野が開拓されることになる。

以上の例は何を物語っているのだろうか。学問の進歩は、意図と結果が必ずしも直結しているわけではない、ということである。研究は、当初の意図や計画通りに必ずしも進まない。当初の関心から次第にずれることもあるし、途中でまったく別のアプローチを取らざるを得ない事態も生じる。もちろん、ある明確な意図をもって探求した結果、求めたものが得られるということもある。しかし、学問の歴史の中では、重要な発見や学問の進歩は、意図しないところから「偶然」生まれるというケースも多い。もちろん偶然を必然へと転化する力量は、研究者の探求能力であることは言うまでもない。何も探さない者が新しいものを見つけていることはない。先に引用した「メノン」のなかで、プラトンが「求めるものはみな、その求めているものの一般的な観念をもっている。さもなければ、見つけたときに、どうしてそれと知るだろうか」と述べた通りである。(p.5)

だからこそ、知的な自由、思想の自由は確保されなければならないのである。この自由は意図した以上の成果を生み出し、「意図と結果の齟齬」を許す自由が、人類が現在もっている膨大な知識のかなりの部分を生み出したのである。人間が小さく事前に研究の目的と方法を設定してしまうことによって生み出されるものが、偉大な発見だとは限らない。これは自然科学でも、人文学でも共通する真理であろう。自然科学におけるペニシリン、X線、電流と磁気の関係、バルサミ、ダイナマイト、ポリエチレンなどの発明は、**B**と偶然の産物以外の何ものでもなかった。

人文学・社会科学においては、同時代から「異端」とみなされていた学説や理論が、後世の常識となったものが多い。中世哲学のトマス・アクイナス、経済学のアダム・スミスが異端妄説とされた時代を考えると、**C**をもちつた研究の限界は明らかなのである。

(猪木武徳『大学の反省』より。なお一部を改めた)

問1 **A** に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 あたかも 2 けれども 3 そもそも 4 なんでも 5 もっとも

問2 次の一文は、本文中の(へ1)～(へ5)のどこに入れるのが最も適当か。その番号をマークせよ。

もちろん、偶然の結果獲得したと言っても、そもそも探していなければ、見つかったことに気づくことはない。

問3 **B** に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 付和雷同 2 猪突猛進 3 率先垂範 4 試行錯誤 5 一気呵成

問4 **C** に入れるのに、最も適当と思われることばを、本文中からそのまま抜き出して、三字以内で書け。

問5 本文の内容と合致するものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

1 あらかじめ想定していたものを見出すだけでは研究は必ず行きづまるのであり、学問はどのような場合においても、頭を白紙にした状態で追究したものしか進展しない。

2 筆者がプラトンやペーコンを引用して語るように、すべての学問には想起ということが大切で、根拠をきちんと見きわめた後にのみ初めてさまざまな発見が可能になる。

3 あらかじめ想定していたもののみが学問の限界を打ち破るのであり、意図を超えた結果だけを採用するならば、錬金術や永久機関などがもたらした新分野は進展しない。

4 筆者がプラトンやペーコンを引用して語るように、すべての学問の要は、好奇心がもたらす発見にあり、そのものがいかに他のものと似ていないかを見出すことである。

5 あらかじめ想定していたものを見出す研究も大切であるが、学問上の自由を確保することで、想定外の結果を得ることも相当あり、またそのことで進展したものも多い。

三 次の文章を読んで、問いに答えよ。

総論

古の俗言は、今の世の古言なり。今の俗言は、後の世の古言なり。古言は学ぶべくして、言ふべきものにあらず。俗言は言ふべくして、学ぶべきものにあらず。しかるに、近き頃、万葉様といふことおこりて、世の人の聞こえぬ詞を使ひ出だせるは、かたくななる業なりかし。万葉の歌も、宣命、祝詞のことばも、その世の人は少しもさはりなく聞き知りしものなるは、その世の俗言なればなり。今の歌も、千年の後はしかならむ。専ら古を尊み、今を賤しめて、あがれる世にさかのほらむとすれども、清濁定まらず、日々に流れ行く言の葉の源、いかでか汲み知ることを得む。

A、古調をかすめ、古言をとりて、古に返りたりと思へるは、かたはらいたきことならずや。よし、古に返り得たりとも、今の大御代にそむきて何かせむ。されば、代々の撰集、いづれか同じさまなる。その移りかはる、御代御代の風俗にして、いかにともすべきものならず。かの古に返さむとするは、流るる水をせくがごとし。せきて止まるものは。果てはあらぬ方に流れさすらへて、いよいよ濁り、ますます流れて、澄む瀬なくなりぬべし。

古言をのみ雅なりとし、常言を俗と賤しめてとらざるは、臭体なりとおのれを厭ふに似たり。厭へども身を捨つることを得ず。賤しめても俗をまぬがれ難し。俗中に処してこそ歌はあなれ。深山幽谷に世を遁れ、無為寂然を学びて、心に思ふ隈なく、或は身をなきものにはふらかしたらむには、何の歌かあらむ。されば古今集の序にも、「世の中にある人ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひ出だせるなり」など言へるにあらずや。世を離れ、身を捨てて、いかでさる感哀の起こるべき。俗中に居て俗言を言ふは、臭体をもて臭体をととのふるがごとし。

名所

名所なりとて、いまだ見ぬ境を詠めるはいとも浮きたることなりかし。

B

、古人の歌をもて照らし考ふとも、波寄せし

住吉の松は岡の司に聳え、浮き寝を侘びし猪名の湊は舟漕ぎ寄せし跡だになし。いかで古にたがはざらむ。もとより、名所と

定めて歌詠みしにはあらず。よりよりさる便りにつきて詠めるを、後より指して言ふなるのみ。今もいづこにもあれ、その折々、さるべき便りにつきては、いかなる地名をも詠みつべし。されど、常の題詠に、けしからぬ地名をまうけ出でて詠むべからず。知らぬ境を推しはかりに詠みて当たらざるは、大武三位が「有馬山」の歌なり。こは万葉の「しながどり猪名野を行けば」云々を、思ひ誤りて、推しはかりに詠めりけむ。猪名野と有馬山とは五里ばかりへだちたり。三位の歌のごとくならむには、有馬山のうちに猪名野なくてはかなはず。「大原や小塩の山」「春日野の飛火の野辺」などは、みな、「大原なる小塩の山」「春日野なる飛火の野辺」を詠めるなり。猪名野、有馬山は **C**。かかる類ひ多かるべし。 **D**、いま誤りて詠めらむ歌、もし千載の後に伝はらば、必ず後人をまどはずべし。心すべきことなりかし。

〔歌学提要〕より

注 司つと 小高い場所。

大武三位が「有馬山」の歌有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする（後拾遺和歌集）しながどり猪名野を行けばしなが鳥猪名野を来れば有馬山夕霧たちぬ宿りはなくて（万葉集）。ただし、本文では「来れば」を「行けば」としている。

問1 傍線⑦の「さはりなく聞き知りしもの」、⑧の「いかで古にたがはざらむ」を、それぞれ現代語訳せよ。

問2

A、

B、

D

に入れるのに、最も適当と思われるものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 なほ 2 さて 3 よも 4 さるを 5 たとへ

問3 傍線①の「身をなきものにはふらかしたらむには、何の歌かあらむ」の理由として、最も適当と思われるものを、次

のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 浮き世を通れると澄んだ心で現世が観察できるから。
- 2 代々の風俗てまりの変化に即してこそ真の歌ができるから。
- 3 悟りに至る前の心情が生活感のある歌のもだから。
- 4 現世から離れたら歌を詠み味わうことができなくなるから。
- 5 俗なる身を歌に没入させてこそ現実味ある歌ができるから。
- 6 俗世の生活感覚にたつ感慨みやびを雅な歌に昇華するのが良いから。

問4

C に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 一つに連なる地名にあらず
- 2 異なる名をつけし地なり
- 3 同じ所の変はれる跡なり
- 4 二つに分かるる名所にあらず
- 5 異なる地に変はりたるべし

問5 傍線②に「必ず後人をまどはずべし」とあるが、同様の内容を述べている一文を、「総論」からそのまま抜き出して、

初めと終わりの五字を書け。

問6 傍線①、④の品詞の文法的説明として、最も適当と思われるものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマーク

せよ。

- | | | |
|--------------------|-------------|---------|
| 1 断定の助動詞ナリ (デアルの意) | 2 伝聞の助動詞ナリ | 3 動詞 |
| 4 断定の助動詞ナリ (ニアルの意) | 5 形容動詞の活用語尾 | 6 動詞の一部 |

問7

本文の内容に合うものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 今の常言は後世の雅言の候補であり、古調にかなう歌語の資格がある。
- 2 古言の研究を深めれば、過去の言葉の源流をたどることが可能となる。
- 3 今の言葉も、いずれは将来の古言となり理解が困難になる運命にある。
- 4 俗世の様々な経験があつてこそ、古歌に劣らない表現技量が育まれる。
- 5 歌の名所も、その特徴が折々に詠まれることで定着してきたのである。
- 6 古典の名所も、今のその模様をよく見届けて詠めばすぐれた歌になる。

問8

『古今和歌集』の歌人を、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|------|---|-------|
| 1 | 額田王 | 2 | 源実朝 | 3 | 大伴家持 | 4 | 式子内親王 |
| 5 | 紀貫之 | 6 | 壬生忠岑 | 7 | 藤原家隆 | | |

四 次の文章を読んで、問いに答えよ（設問の都合上、調点を省略した部分がある）。

昔、人謂^フ農人^ハ三時^ノ之^ノ勞[、]一時^ノ之^ノ逸^ト。余^ハ窃^ニ謂^フ農人^ハ未^ダ嘗^ル有^ラ一日^ノ逸^モ也^ト。特^ニ治^ム農務^ヲ必^ズ三時^ニ而^ル後^ニ収斂^ル始^メ畢^ス故^ニ可^キ云^フ然^リ耳^ト。不^レ知^ラ収斂^既畢^ハ、官^ハ逋^ホ私^ノ負^ノ紛^紛集^擾、仰^ギ事^ハ俯^シ育^ム惻^ク惻^{トシテ}関^シ心^ニ、当^タ斯^ノ時^ニ而^ル不^レ遑^ニ暇^ス食^{スル}、猶^ホ可^ク左^ニ支^シ右^ニ吾^ス、稍^ヤ或^{イハ}懈^ル焉^ト、噉^レ飢^ニ号^フ寒^ニ立^テ至^ル矣^ト。聶^デ夷^中、二^ニ月^ニ売^リ新^ニ糸^ヲ、五^ニ月^ニ糶^ニ新^ニ穀^ヲ之^ノ句[、]先^ニ儒^稱為^ス三^ニ曲^ニ尽^ク田^ノ家^ノ情^ノ状^ト。今[、]殆^ド有^リ甚^ク焉^ト。蓋^シ蚕^糸、五^ニ月^ニ、穀^粟、九^ニ月^ニ、此^レ常^ノ候^{ナル}耳^ト。預^{アラカシメ}取^{リテ}給^{スル}於^ニ二^ニ三^ニ月^ニ、前^ニ猶^ホ是^レ稍^シ能^ク過^ス活^ノ家^ノ也^ト。其^レ為^ス百^ノ孔[、]千^ノ瘡^者、皆^テ遞^テ年^ニ隔^ス歲^ト。咄^{トツ}咄^{トツ}、藉^カ是^レ二^ニ月^ニ之^ノ売^リ、五^ニ月^ニ之^ノ糶^リ、豈^ニ足^{ラン}以^テ形^{スル}容^ノ之^ヲ哉^ト。欲^ス求^ム頃^刻之^ノ逸^ヲ、不^レ可^ク得^ル矣^ト。噫^ト。

（戒庵老人漫筆）

注 官通私負 〓 役所に滞納している税と個人からの借金。 集擾 〓 あつまること。

仰事俯畜 〓 親に仕えることと子供を育てること。 惻惻 〓 ひどく心配する様子。

左支右吾 〓 四苦八苦して生活を維持すること。 聶夷中 〓 唐の時代の詩人。

「二月売新糸、五月糶新穀」 〓 聶夷中の「詠田家」詩の一節。

糶 〓 米や穀物を売りに出すこと。 先儒 〓 むかしの学者。 過活 〓 生活が安定して暮らせること。

百孔千瘡 〓 天災などに遭って甚大な被害を受けること。 逐年 〓 毎年。

咄咄 〓 意外なことで驚く時に発する言葉。 頃刻 〓 つかの間。

問 1 傍線①の「嘗」、③の「焉」の読み方を、送りがなも含めて、それぞれひらがなで書け。

問 2 傍線②の「二月売新糸、五月糶新穀」の詩句に使用されている修辞の方法を、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 倒置 2 律詩 3 絶句 4 置き字 5 対句 6 比喩

問 3 傍線④の「猶是稍能過活之家也」の書き下し文として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 猶ほ是れ稍能く過活するの家なり
2 猶ほ是れ稍之を過活するの家を能くするなり
3 猶ほ是れ稍能く過活する家に之くなり
4 猶ほ是れ稍能く之を過活する家のごときなり
5 猶ほ是くのごとく稍能く過活する家に之くなり
6 猶ほ是れ稍能く過活するがごときの家なり

問4

本文の内容に合うものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 近年、聶夷中のように農家の窮状を熟知しない学者が無責任に詩を書いているのは、不謹慎な行為である。
- 2 昔の農家は、ほぼ毎年起こる天災に対し、二月や五月に糸や穀物を売って、ひと時の安楽を手にしていた。
- 3 昔の人は、三時間農作業をした後に一時間ゆっくり休めといったが、近頃の状況にはまったく適合しない。
- 4 近頃の農家の実状は、聶夷中の詩句の表現よりもはるかに過酷であり、しばしの安息すらない状態である。
- 5 農閑期になると農家は、親孝行や子育てに忙殺され、納税する時間すらなくなって、経営の悪循環に陥る。
- 6 近年の農家の状況は、聶夷中の詩句に描写されているように、一年中休む間もなく苦しみにあえいでいる。